

平成艸紙



おりおりの記

小唄の世界と花柳界

極東証券
代表取締役会長

菊池 廣之

36歳の時、親父に勧められたのが小唄だ。「歳を取ってからのカラオケは飽きる。邦楽は習わなくては絶対に唄えない。そして、自分の金で遊べ。株とオンナに惚れるな!!」これが親父の遺言だった。小唄を習いはじめて、もう38年が経つ。自分が好きな曲を唄い、その小唄振り（踊り）を芸者にしてもらおう…これ程男冥利につきるものはない。小唄は、人前で一応唄えるようになるには10年かかると言われている。地方（ちかた）や踊り手との相性や間合いがとても重要だ。私が初めて小唄に触れたのは、親父と当時の野村證券の瀬川会長が芳町にあった料亭の宴席で丁々発止でやりあっているところに同席させてもらった時だ。親父の小唄の艶っぽさには驚かされた。

八代亜紀の「舟唄」で、「…いい」というのが4回出てくるが、それぞれ違う感情で唄うようにプロには指導している（作曲家の浜圭介氏）、とのこと。小唄も、季節の移ろいや男女のもつれを演じるので、唄の心を理解して唄うことが肝要なのだそう。今の人は、唄声はいいけれど、その小唄が持つ感情や味わいは出せない方が多い。今のような社会環境では無理もないことではあるが…。

我が業界では、(株)証券保管振替機構の加藤さんがうまい。忙しい役所生活の中、どこで練習していたのだろうか。生意気で申し訳ないが、声量は見事だが残念ながら唄に艶がない。とくに女

ものの感情が今一つ足りない。「男が唄う女心」のほうが、女が唄うよりも艶っぽいのだそう。無理もないことだ。我々とは育った環境が違うからだ。



去る3月15日、日本証券経済倶楽部50周年の解散式の後、理事長だった今井敬氏を囲んで赤坂で謝恩会をした。今井さんの小唄はうまい。年季の入った喉を聞かせてくれた。超多忙の中でいつ練習されているのか伺ったら、経団連会長時でも小唄のお稽古日は月4回で、その前後2時間は必ず秘書に時間をとらせて、練習をなさったとのことであった。唄（詞）といい、小唄のサビといい、感服した。最後に唄われた「酒と女」、その小唄振りは今でも印象に残っている。

最後に、私の大好きな曲を紹介する。

「うつり香」—小唄で一番色っぽい唄
移り香や たたむ寝間着の襟元に
ひとすじからむ こぼれ髪
婦してやるんじやなかったに
ふくむ未練の夜のさかずき